

氏名(本籍)	いけ だ しん いち (東京都) 池 田 進 一		
学位の種類	博 士 (心理学)		
学位記番号	博 乙 第 1,128 号		
学位授与年月日	平 成 7 年 11 月 30 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	心 理 学 研 究 科		
学位論文題目	間接的要求における認知的処理機構		
主 査	筑波大学教授	教育学博士	福 沢 周 亮
副 査	筑波大学教授	教育学博士	太 田 信 夫
副 査	筑波大学教授	教育学博士	海 保 博 之
副 査	筑波大学教授		桑 原 隆

論 文 の 要 旨

1. 本論文の目的

本論文の第一の目的は、語用論の領域を間接的要求に限定したうえで、また、処理時間の要因を操作したうえで、間接的要求における記憶の機構を検討することにある。また、第二の目的は、間接的要求における記憶の機構を検討することに実際的な意義のあることを示すために、間接的要求が用いられている実態と間接的要求が用いられるための条件を検討することにある。

2. 本論文の構成と概要

本論文は、5章、本文199頁、引用文献11頁、図表96葉より成っている。

第1章 序論

第2章 要求表現の使用実態と使用条件

第3章 実験室実態における間接的要求の形式と意味の記憶

第4章 日常事態における間接的要求の形式と意味の記憶

第5章 総括

第1章では、間接的要求研究の意義が指摘されると共に研究史が整理され、三つの問題点が明らかにされた。①諸独立変数における処遇効果の大きさを明らかにできるような実験方法や分析方法を考案すること。②再認法だけでなく再生法を用いること。③再生にあたっては比較的長い遅延期間をおくこと。更に、本論文の目的が二つ明記された。①語用論の領域を間接的要求に限定したうえで、また、処理時間の要因を操作したうえで、間接的要求における認知的処理機構を検討すること。②間接的要求が用いられる実態と間接的要求が用いられるための条件を明らかにすること。

第2章では、二つの分析と二つの実験(実験1, 実験2)が取り上げられ、分析では、状況によって慣習的な要求表現が異なることを報告した実験研究の結果が、日常場面でも同様に生起することが確認された。また、実験では、先行研究の問題を改善して追試を行ったところ、間接的要求の生産に関して協力表現が顕著に多いこと、また、画一主義・平等主義という傾向の高い者は、要求表現をする際に協力表現を多く生産し、その傾向の低い者は協力表現をあまり生産しないことが確認された。

第3章では、四つの実験（実験3～6）が取り上げられ、実験3では、多重意味モデル（字義通りの意味も字義通りではない意味も同時に処理されるとみなすモデル）と慣習的意味モデル（字義通りではない慣習的な意味のみが処理される場合があるとみなすモデル）のいずれが適切かの検討が行われ、また、三つの仮説の正否についても検討が行われた。その結果、慣習的意味モデルを支持する結論が得られ、三つの仮説についても、ほぼその正当性が認められた。実験4～6では、実験3において仮説が支持されなかった部分に関して、その原因が明らかにされた。特に、実験3、実験4、実験6では、文の表層形式は急速に忘却されるが、文の内容はよく把持されることが追認された。本章で取り上げた四つの実験結果により、間接的要求の処理に関して、実験室事態において時間要因の影響のあることが確認された。

第4章では、二つの実験（実験7、実験8）が取り上げられ、実験7では、日常場面に近い事態で談話の処理時間を限定したうえで、三つの時期（直後、1週間後、8週間後）における再生結果が検討された。その結果、形式の面では、再構成（所与の状況での文や文章の構造などに関する一般的な既有知識にもとづいて原材料を作りなおす過程）による場合があったこと、意味の面では検索による場合があったことが明らかにされた。実験8では、日常場面に近い事態を設定することによって、直接的要求と間接的要求における処理機構が検討された。その結果、直接的要求と間接的要求では、処理機構が相違すること、およびその相違が両要求における再生に影響していることが明らかにされた。以上の二つの実験結果により、間接的要求の処理機構に関して、日常場面に近い事態においても時間要因が影響を及ぼすことが認められた。

第5章は総括で、以上のまとめが行われた。

3. 本論文の成果

本論文の第一の目的は、語用論の領域を間接的要求に限定したうえで、処理時間の要因に焦点をあて、間接的要求における記憶の機構を検討することで、この目的に関して、実験室事態と日常場面に近い事態で、設定された仮説の正否が実験的に検討された（実験3～8）。その結果、実験3と実験4の反応時間についての結果では、少なくともGibbsの方法による慣習的意味モデルが支持されること、実験3～6の再生についての結果では、慣習的意味モデルにかかわる仮説がおおむね支持されることが明らかにされた。

また、第二の目的は、間接的要求における記憶の機構を検討することに実際の意義のあることを明らかにするため、間接的要求が用いられている実態と間接的要求が用いられている条件をあらかじめ吟味することにあつた。分析1・2および実験1・2の結果、状況によって慣習的な要求表現が異なるという先行研究の結果を追認すること、および、個人が他人を意識する程度という条件が間接的要求の使用に影響を及ぼしていることが明らかにされた。

審 査 の 要 旨

本論文は、間接的要求の機構に焦点を合わせた研究であるが、先行研究の検討から、独立変数が一定でないことを考慮せずに従属変数としての形式と内容についての検討結果を論じてきたことについて、また、ほとんどの研究が再認法を採用してきたことについて、また、遅延期間が短いことについて、問題点として取り上げ、それらを改善したうえで、綿密な実験的検討を行い、見るべき成果をあげた点は高く評価できる。特に、慣習的意味モデルについて支持する結果を提出したことは、この領域の研究を一步進めることになったといえる。

ただ、一方では、研究上の制約が大きいとはいえ、記憶に焦点が合わされすぎていて、理解についての検討がもっとほしかった点は否定できない。さらに、新しいモデルの提出についての検討もほしかったところである。

しかしながら、実験室事態だけでなく日常事態に近い事態を設定して、条件を厳密に検討したうえで、上記の成果をあげたことは、この領域に新しい知見を加えたといえるのであって大きな意義が認められる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。